

社会体制転換に伴う「観光」の変容

—ポスト社会主義国キルギスにおける温泉施設利用者のライフヒストリー調査—

アコマトベコワ・グリザツト

一. はじめに

現代社会に「観光」と称される社会現象や行動が存在し、それらとかわりをもつ事業活動が存在していることはよく知られている事実である。日本を含め工業化が進展した諸国においては、「観光」は国民生活の一部となり、一般大衆のものとなっているとされる(前田、一九九一)。しかし、この「観光」という現象の大前提にあるのは資本主義に基づいた西欧社会であると考えられる。これは一八世紀後半イギリスではじまった産業革命以降の工業化や大規模な工場制生産、生産技術の発展などによる経済的社会的革命以降、人々が労働により賃金を得ること、そして余暇を自由に得るようになったことと関係しており、このよう

な社会変化が後の観光の発展に大きな影響を及ぼした。つまり、近代観光は労働の中から発生し、労働と余暇を明確に区別することにより発展してきたのである(小池ほか、一九八八)。

以上のことから、現在一般に議論されている「観光」の理論の枠組みというのは、ある限定的な社会のもとで作られた枠組みを適用して議論されている可能性がある。たとえば、旧ソ連の社会主義国キルギスで行われていた温泉施設^{〔1〕}への旅は、「観光」に似ているが、実際には、ソ連時代は労働で成果を上げた人しか行けず、温泉施設へのパウチャーの割り当てはソ連の首都モスクワで行われていた(アコマトベコワ、二〇一三)。これは、日本や西側の社会における「暇だから、温泉に行つてこよう」というライフ

スタイルではなく、国家が「観光」までコントロールしていたからであり、資本主義国の下での「観光」とは異なっていたからである。このような社会体制と観光との関係についての研究はいまだに十分になされていないが、少数の研究者が観光史を社会体制という観点から分析している。Gorsuchら(2006)は、社会主義国であった旧ソ連において行われていたヨーロッパへの「海外旅行」はただ単に地理的に国境をこえるのではなく、社会主義的体制から資本主義体制への移動を意味していたのだと指摘している。また、Baranowskiら(2001)は、「観光」や「バケーション」とは消費やレジャーの発達プロセスの一部であり、社会階級、社会的地位、集団的アイデンティティの形成を母体として歴史的变化を遂げるものである、という観光研究に対する史的アプローチを主張している。以上の背景から、本稿は社会体制の変化に伴う観光の変容を、ポスト社会主義国であるキルギスの温泉施設観光を事例に、あるキルギス人のライフヒストリー調査を中心に歴史社会学的な視点から明らかにすることを目的とする。

二 社会体制変化とライフヒストリー研究

二一 研究手法

ライフヒストリー研究とは、個人に焦点を合わせた語り（ナラティブ）を重要な資料の一つと見なしている点で、「ライフストーリー」と同じようにみえるが、そこで描かれる人生が主に時系列的に編成されている点でライフストーリーとは異なる。ライフヒストリーは、典型的には、幼年期、教育期、就職、結婚などのライフステージや人生で遭遇した様々な出来事を含むものであり、一つの記述のパターンである（櫻井、二〇一二）。また資料としても、インタビューによる口述資料のほかに自伝、日記、手紙などの個人的記録を重要な資料源として利用する（櫻井、二〇一二）。本稿でも聞き取りによる口述史や、スケジュール帳や写真といった個人の所有物からある人物のライフヒストリーを再構成することを試みる。

ライフヒストリー研究に関しては、主に社会学や文化人類学の分野で蓄積がなされてきた。社会学は社会的現実を対象とし、社会という現実が、過去の現実も現在の現実も、歴史的現実以外のものではありえないという立場を採る（中野、一九九五）。ライフヒストリー（生活史、個人史）は、本人が主体的にとらえた自己の人生の歴史を、調査者の協力のもとに、本人が口述あるいは記述した作品である。中野は、民族的な研究と同様、自他の伝記作成の場合も含めて、人生の現実を再構成することによって解明しようとする。

するライフヒストリーなるものは、私小説や歴史文学のような創作、つまり現実の人生や歴史に虚構を加え芸術的に再構成されたフィクションからは厳密に区別されるのだと主張する（中野、一九九五）。

ライフヒストリー（生活史）は個人の一生（生涯）を対象とした個人中心的アプローチによって成立している。だが日本語の「生活」には、集合的な意味では衣食住生活や物質文化、生活水準や家族、地域社会などの日常生活など、非常に広範な意味が込められており、必ずしも「個人」だけに限らずとも、「村の生活史」や「都市の生活史」、「女性の生活史」などが存在しうるわけであると有末は主張する（有末、二〇一二）。だが本稿では「個人」に焦点を当て、それをキルギスの歴史的な出来事と関連づけることによって、キルギスにおける「観光」の構造が見えてくるのではないかという立場を採る。

このようなライフヒストリー法を用いた研究は社会学や文化人類学はもちろん、人文地理学的研究でもみられる。たとえば、湯澤（二〇〇一・二〇〇二）は結城紬生産地域における家族経営を女性三代のライフヒストリーから考察している。彼女はライフヒストリーを記述していく際に、紬の切れ端や個性的な資料である「機織帳」を分析対象としている。彼女は紬生産やそれ以外の生産労働、家事、育

児といった暮らし全体から、女性三代の二〇年間のライフヒストリーを比較検討している。そして、紬生産に関わってきた一家族の暮らしの変化を通時的に記述すると同時に、高度成長期に稼いだある女性だけが経験した変化のプロセスを、複数の女性のライフヒストリーと重ねながら描き出している。それにより、結城紬生産地の存立基盤としての家族の役割を強調し、家族内部の事情が積み重ねられた結果として産地や地域の変化が現れるものであると主張している（湯澤、二〇〇一・二〇〇二）。このような湯澤による興味深い研究法は、本稿で試みるような「個人」を研究することによって社会体制の変容を明らかにする際にも参考となる。

二・二・ 体制変換とライフヒストリー研究

体制変換に関する研究は、社会学的、経済学的、政治学的、人類学的、歴史学的な側面から数多くの研究蓄積がなされて来た。たとえば、石川（二〇〇九）の『体制変換の社会学的研究』は、以前旧ソ連と同様に社会主義体制下であった中欧のハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアにおける労働と企業を対象にした興味深い研究である。石川は、ハンガリーにおけるタイヤ製造企業と自動車部品製造

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

工場、ポーランドにおける、ガス石油供給企業、機械製造企業、電気ハイテク工場、チェコスロバキアにおける、小型モーター製造企業、ベアリング製造企業、火力発電所、鉄鋼企業、自動車部品製造企業といった企業の従業員にとつての体制内改革と体制転換過程における労働を具体的に分析し、企業と従業員が金銭授受や製造プロセスなどの点を改変しながら資本主義・市場経済に適応していく過程を解明している。石川のこの研究は本研究で取り上げる観光者の社会体制の変換に対する適応にも参考になる。

また、社会主義体制を経験した中央アジアについては、ウズベキスタン人研究者ダダバエフ（二〇一〇）の『記憶の中のソ連―中央アジアの人々の生きた社会主義時代―』という興味深い研究があり、この中では、社会主義体制であったソ連の「観光」についても述べられている。具体的には、ウズベキスタン在住民四〇代から八〇代まで幅広い世代を対象にインタビュー調査を行なわれ、ソ連時代を生きた人々がソ連崩壊後に独立国家として生まれ変わった生活の中で、ソ連時代をどのように記憶しているのか、彼らがどのようなことを経験してきたかを記録したものである。ダダバエフは、調査対象者の記憶の中におけるソ連時代の国民の生活や感想を詳しく描き、歴史的、経済的、政治的そして社会的な面から分析を行っている。ダダバエフ

は、数多くの証言から、政治と国民の間には暗黙の社会的な契約のようなものが存在していたように見受けられ、その仕組みほどの資料にも明確に言及されていないが、以下のような印象を受けると主張している。すなわち、ソ連時代の共産党や政府は、全面的に国民の生活の面倒をみて、彼らに必要最低限の生活を保障し、その代り、国民は団結して政府を支持した。ソビエト社会における様々な制限を彼らは前向きに受け入れていたのである（ダダバエフ、二〇一〇）。さらにダダバエフは「観光」について、

国民の大半はソ連以外の国へ旅行する機会がなく、ウズベキスタン国内かソ連各地を巡っていた。海外に出ることを許される人は少なく、その人たちも資本主義国ではなく、社会主義国に出かけることだけが許されていた。その政策の主目的は「腐敗とモラルの低下を引き起こす欧米文化」がソビエト国民を衝撃しないようにするためだった。そのため、海外に行く人は必ずそのモラルや考え方に関して面接を受け、海外へ出すことに相応しい人物なのか評価され、判断が下された。このように孤立した状況であっても国民にはそのような実感がなく、彼らは機会を見つけてはソ連の他の共和国や社会主義国への訪問を楽しんでいた。その一つが新婚旅行である。

就職していれば、旅行をする経済力があり、給料が
少ない人でもウズベキスタン国内もしくはソ連各地
を回ることができた。しかし、社会的な立場も給料
も高く、何かしらコネクションがある人であれば、
ソ連と友好関係にあった社会主義国を旅行するのは
難しいことではなかった。新婚旅行や家族旅行以外
に、ソ連内の共和国間では留学制度が盛んで、学力
がありさらに勉強したい人であれば、他の共和国へ
留学が可能であった。特に、留学生はモスクワやレ
ニングラードの大学に留学していた。現在では、経
済力がある人が留学することが多いが、当時はむし
ろ貧しい家の子供が優先的に奨学金を受けられ、大
学入試の際にも特別枠で入学が認められた。

と記載している（ダダバエフ、二〇一〇：二四二、
二四四）。ダダバエフは、人々の記憶を主な研究対象とし
ているが、同時にそのような記憶が客観的であり、また歴
史について最終的な結論を見いだせるものであるとはして
いないとも強調している。ソ連時代に対してノスタルジー
を感じ、秩序を懐かしがるソ連時代の支持者と、現在の新
しい経済社会状況下で良好な社会的地位を得、ソ連時代の
良くない部分のみを強調する者とが共に存在する。このよ
うな意味で、記憶は特別な注意を要するものである。過去

を過剰に美化し過去にノスタルジーを感じながら生きるこ
とは今の自分を否定することになるように、過去を否定し、
今の自分を過去から切り離して生きることは社会が独自性
を失うことにつながるからである。

以上のように、ダダバエフはソ連時代の人々の記憶を通
して、社会的、歴史的、経済的部分を詳しく描いているが、
「観光」については一般的な状況が紹介されるだけで、特
に詳しく分析されているわけではない。

また先述した通り、旧ソ連における観光については歴史
的な研究がある。代表的な研究として、Anne E. Gorsuch
と Diane P. Koenker が二〇〇六年に編集した *Tourism:
The Russian and East European Tourist under Capital-
ism and Socialism* という論集がある。この研究では、社
会主義体制が大衆に集団「観光」を広げ、それは国民の肉
体的かつ精神的状態に対する貢献があったが、他方、これ
は資本主義国体制における観光とは異なり、社会主義体制
下では観光するためにバウチャーが必要だったことが述べ
られている。同書の中で Braecwell は、一九六〇年代に
ユーゴスラヴィアで大衆化したヨーロッパへのショッピング
は、買い物を求め長い距離を歩いたりするため、ハイキ
ングと同様な能力とノウハウが必要とされたと主張してい
る。また、同書の中で Noack が主張しているように、ソ

ビエト連邦で観光が大衆化されたのはブレジネフ時代であり、温泉施設、休暇施設といったレクリエーション施設で休暇を過ごした国内旅行者の数が一九七〇年に一七〇〇万人から一九八三年には四五〇〇万人にまで増加した。だがこれらは、計画的な観光している人たちであり、いわゆる「バウチャー」を利用して観光する人たちであった。しかし、ソ連時代後半には、非計画的な旅行者 (*dikari* あるいは *dkie turisti*) が存在した。また、男女がテントを持って出かけるセックスが目的の観光遠足 (*turisticheskyy pohod*) が黒海海岸に存在した。以上のように、社会主義時代の観光に関する研究はこれまでも存在してきたが、いずれも個人に焦点を当てた研究ではなく、ソ連時代の観光の全体的な歴史を考察したものであった。

また、旧ソ連国キルギスの「観光」に焦点をあてた研究もあるが、ソ連時代のキルギスにおけるリゾートの利用者に関する事例研究や (Eckford, 1997; Palmer, 2009)、キルギスでは古来より存在している温泉に関する医学・化学分野の研究はあるものの、利用形態や利用者に関する研究は Aleksandrov (1931) による一九三〇年の温泉施設利用者に関する研究にとどまっている。そのため筆者はこれまでキルギス各地の温泉地でフィールドワークをすることにより、社会主義体制から資本主義体制転換期に生じた

変容を、旧ソ連の一員であったキルギスの観光の中でも特に「温泉」に注目して研究してきたが、社会体制変化という歴史的な変化の中でキルギスの観光がどのように変化したかという問題を、個人の経験に焦点をあてて明らかにした研究はいまだに存在しない。

以上の背景から、本論文は社会体制転換に伴う「観光」の変容を、社会体制の転換期に生じた個人のライフヒストリーに注目することにより考察することを目的とする。具体的な研究対象は、ポスト社会主義国キルギスにおける温泉施設利用者である。そして社会体制転換期に生じた温泉施設利用者の人生を通して、社会体制転換に伴う「観光」の変容を描き出す。

三．社会体制の変化に伴う「観光」の変容

三．一．キルギス共和国における温泉施設利用の変化

キルギス共和国は、中央アジアにある旧ソビエト連邦の共和国であり、山国である (図一)。一九九一年のソビエト連邦崩壊以後、連邦内部の共和国はそれまでの社会主義から資本主義へと路線を変更した。この体制変換の課程の中で、キルギス国家は新たな経済政策や開発政策の一つと

して観光化を推進した。その結果、近年のキルギスでは外国人旅行者が増加し、二〇一〇年に約一三二万人だった外国人観光客は二〇一一年には約三二一万人にまで増加した。内訳をみるとカザフスタンから約一四万人（約四六％）、ウズベキスタンから約四三万人（約一四％）、ロシアから約一〇二万人（三三％）であった。その他にも、少数ではあるが日本や中国、それからヨーロッパからキルギスを訪問する観光客が約七％を占める（表一参照）。

筆者が二〇一一年・二〇一四年に行ったキルギス各地の温泉を対象とした現地調査からは、外国人観光客にとってハテンシヤン山脈への登山や、標高一六〇〇mに位置するイシク・クル湖畔リゾートや渓谷に存在する温泉などが人気の観光スポットであることが明らかになった。その中でも、ロシアをはじめとするヨーロッパの外国人観光客には山岳部や渓谷に位置する温泉が人気であり、彼らにとって長いトレッキングの途中のリフレッシュに欠かせないものとなっている（アコマトベコワ、二〇一三）。

しかし、前述のようにキルギス人のみならず外国人観光客がキルギスの温泉を観光地として訪問するようになったのは最近のことであり、ソ連成立以前およびソ連時代とソ連崩壊以降において、キルギスにおける温泉の利用や利用者は異なっていた。キルギスにおける伝統的な温泉利用は、

日本やヨーロッパの温泉利用とは異なる。かつてキルギスでは現地住民が温泉地に伝統的な家屋「ボズ・ユイ」^③を造ってそこに何日も滞在し、温泉が出る場所を石で囲み、周縁を清潔にしたのち入浴したのである（Petrosyants, 1926; Ashmarin, 1934）。また温泉は宗教的な儀礼の場所としても使われていた（Junabaev et al., 2011）。このような伝統的な温泉地利用は、キルギスの社会体制変化やヨーロッパ人の来訪により変化した。

初めてキルギスにおける温泉や治療分野が記述され出版された作品は一八世紀の終わりにまで遡る。それは、ロシアからキルギスを帝政の業務で訪れた公務員の日記、*Пымецмне канунаша Поркоча, 1771*（キャプテンルチュコフの旅）であり、その中でアラ・タウ地域の温泉について言及されている（Rychkov, 1771）。さらに、バルトールト（Bartoldt, 1891）は、キルギスの温泉（現ジャラル・アバド温泉施設）*Hazret Ayub* について言及しており、*Hazret Ayub* には中央アジアのあらゆる場所、さらにアフガニスタン、中国、インドから信仰者たちが病気の治療のために来ていたと報告している。

さらに、考古学的研究によると、キルギスのイシク・アタ温泉は二―三世紀には現地住民の間で知られていたとす。これは、イシク・アタ温泉施設の入り口に置かれた仏

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

陀像がこの温泉がササン朝時代には存在していたことが証明している（Denisov, 1950）。イシク・アタ温泉は一般の温泉ではなく、病気を治してくれる温泉であったため、ササン朝の支配者階級により仏陀像が作られ安置されたのではないかと多くの研究者が推測している（Думкин, 2002）。

さらにキルギスのテンシヤン山脈の地学的研究のために訪問し、ヨーロッパ人として初めてテンシヤン山脈に登頂したセミヨノフ・テンシヤンスキー⁹⁾により保健思想に基づく温泉入浴もキルギスにもたらされ、その後、ロシア式銭湯「バーニヤ」も導入された（Jumabaev, 2011）。ちなみに、帝政ロシアの南下政策により赴任して来た国防省や役人のために、温泉や泥温泉の周辺、山や溪谷といった場所に夏の休暇・治療用の施設が作られるなど、帝政ロシア政策により、キルギスを含む中央アジアの温泉利用が変化化した（Aleksandrov, 1931）。だがこの時代の温泉利用は本格化しなかった。Kozlov¹⁰⁾（1967; 1973）の研究によると帝政時代のロシアの三六カ所のリゾート地には六〇のサナトリウムが存在し、利用者は三〇〇〇人に過ぎなかった。さらに、温泉施設を含むリゾート地における滞在客は上流階級に限られ、利用者の属性は、地主と貴族（四一・九%）、ブルジョア代表者（二三・八%）、帝政軍の将校（一〇・五%）、

行政機関者ほか（二三・八%）であった。帝政時代の温泉施設はピョートル一世（Pётр I Алексеевич, 1672-1725）の主導で建設されたため、特定の人々しか利用できなかったと考えられる。

しかし、一九一七年に社会主義改革が起こると、社会主義革命とともに、土地と地下資源は国有化され、家族農業は社会主義経営「コルホーズおよびソフホーズ」が農業生産の主体となった。工業生産、通信運送、商業流通においても、教育医療においても私的企業は禁止され、国有・国营企業が独占した（金田、一九九五：一三二）。ウラジーミル・イリイチ・レーニン（Vladimir Ilyich Lenin Владимир Ильич Ленин）は一九一九年に四月に「国家的に重要な治療分野について О лечебных местностях общегосударственного значения」という法令の中で以下のように宣言した。

ロシア地域における全てのリゾートや療養地はロシア国内のどの地域にあっても、誰のものであっても、全ての施設建物を含めて、リゾートができた土地も含め、ロシア国のものであり、治療のために使われ
☞ (Лечебные местности и курорты, где бы они не находились и кому-бы они не принадлежали, со всеми сооружениями, строениями и

Движимостью, обслуживающими ранее курорт и находящимися на присоединенных и приписанных к курорту землях, составляяют собственность республики и используются для лечебных целей.)

その後、全てのリゾートは国有化され、サナトリウム・リゾート治療の原則、サナトリウム・リゾート分野が発展するために方針や自然資源保護法令などが発布されて以降、帝政時代には富裕層しか利用できなかった温泉施設等は一一般庶民のためのものとなった。さらにソビエト連邦（一九二二—一九九一）の誕生により、一般保養療養所は全国へと拡大し、連邦の隅々にまで建てられるようになった（Kozlov, 1973; 山形、一九八〇）。このような温泉施設の中には、第二次世界大戦中に負傷兵士の療養のために使われたものもあれば、ドイツ軍によって壊されたものもあった。しかし、一九五〇年代になると再び建設が始まり、第二次世界大戦以前の二倍も建設された（Kozlov, 1973: 5）。

一九一七年の社会主義改革後、キルギス内にもソビエト政権が成立したため、キルギスの温泉施設も社会主義革命以降に発展し始めたのだと考えられる。ソビエト連邦時代にはキルギスの温泉施設も発展し、キルギスの温泉を対象

としたさまざまな視点からの研究もなされた（表二）。しかし、表二からもわかるように、キルギスを対象とした多くの研究は温泉の成分や放電といった化学的研究および医学的見地からなされ、社会体制と温泉施設との関係についての研究は数少ない。例外として、Aleksandrov (1931) が一九三〇年代の「キルギスのリゾート地 Курортные Кургашин」の景観、気候、温泉資源、治療への適応と禁忌の説明や温泉利用者の属性と利用習について報告しているのみである。

表三はソ連時代前半一九三〇年の温泉利用についてまとめたものである。表三からは、ソ連時代（一九三〇）はリゾートが位置する場所によりリゾート利用者属性が異なっていたことが理解できる。例えば山岳部や溪谷に存在する温泉施設では、おもに、現業職^②などや農民が治療を受けた（写真一）。しかし、イシク・クル湖^③湖畔気候リゾートでは、農民や労働者より、ホワイトカラー^④の方が多く見られる（写真二）。つまり、帝政が終了しソ連になることで温泉施設を含むリゾートは一般に公開されたとはいえ、リゾートの立地条件により、利用者属性に差があったのだと考えられる。この現象には、外国人研究者も注目しており、例えば Palmer は一九八〇年におけるキルギスのイシク・クル湖は、澄み切った湖水と温暖な気候であり、リ

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコウ）

ゾート地のリゾートハウスやサナトリウム、温泉療養施設、ペンションなどの来訪者は三五万人であったと報告している (Palmer, 2009)。Eckford (1997) も、ソ連時代のイシク・クル湖畔は観光ビジネスでにぎわっており、黒海に次いでソ連で人気のある保養地だったと言及している。このように、ソ連では保健療養を含む観光形態が盛んに行われていたのだといえる。また、イシク・クル湖周辺以外にも、気候療養ができる標高の高い場所では温泉の存在を活かして、温泉療養および休暇のための施設が建設され、一般労働者が保養していたことが報告されている。Koenker (2009) はソ連時代において観光は社会主義の大事なイデオロギーであったと指摘している。また Hofer ら (2002) によると、イシク・クル湖畔は共産党幹部のホリデーステーションであり、イシク・クル湖の汚されていない湖水がソビエト連邦支配層から羨望のまなざしを受けていた。その例として、一九七九年には、イシク・クル湖の北岸の、湖水入浴のほかに温泉入浴を提供する高級サナトリウム「オーロラ」(Aurora) が建設された。これはソ連共産党幹部や高級官僚専用のもので、一般人は敷地内に入ることすらできなかった。

しかし、一九九一年のソ連邦崩壊以後、旧ソ連内の共和国はそれまでの社会主義から資本主義へと体制が変化した

ため、温泉施設の利用形態および利用者も再び変化した。ソ連時代、一般人の立ち入りが禁止されていた温泉施設を含む休暇・療養施設は一般に公開された。以上のように、ソ連時代以前とソ連時代、様々な社会階級のための温泉療養を含む療養施設、リゾート施設が建設されたことが理解できる。

三・二 社会主義体制と「観光」の歴史

ソ連における休暇システムの歴史は、連邦成立初期にさかのぼる。一九二二年に制定された労働法令では、少なくとも五カ月半の労働の任期を持つすべての労働者が年次有給二週間の休暇を受ける権利を有することが規定された (Koenker, 2009)。さらに、一九三六年の法令四一条「ソ連の労働と休暇について」によって、すべてのソ連民は労働後に休暇をとる権利を獲得した。この権利は夜勤労働時間や企業の一日の勤務時間を減らし、週あたり最大四一時間勤務の規定を保証した (Kozlov, 1986)。この「八時間労働」、「週末」及び「年次有給休暇」は、一九三〇年代末の新興ソ連システムでは、回復と健康的な休息の機会を構成する三角形であり、中でも、年次有給休暇は労働力の福祉を推進するソ連社会主義へのもっとも革命的な貢献で

あったと指摘されている (Koenker, 2009)。一九三六年から一九四〇年にかけては温泉施設を含む予防・治療施設が増加し (ibid)、一九四〇年にはその数は三六〇〇カ所まで増加した (Kozlov, 1986)。

ソ連における休暇施設には、リゾート (курорт курорт)、温泉・泥を使って治療を行う場所、海や湖、山、森林での気候療養ができる場所であるサナトリウム、および温泉治療等が受けられない施設が含まれており、それらが「休暇ホーム」(дом отдыха дом отдыха) と呼ばれた (Azar, 1972; Koenker, 2009)。両方とも労働組合により管理され、どの施設に行くにもバウチャー (путевка путевка) の調達が必要であった (ibid)。これらのバウチャーは、中央労働組合当局によって割り当てられ、地元企業の委員会を通じてそのメンバーに配布されることになっていった。このようなリゾートに行くには医者¹の判断が必要であり、必要としている人から順番にバウチャーが与えられ二・四週間滞在した。治療のために訪れる者は「患者」(больной больной)、休暇するために訪れる者は「休暇者」(отдыхающий отдыхающий) と呼ばれた。ここでは「治療手順」(лечебные процедуры spa regime と呼ばれる、看護師や医師の監督下での温泉入浴、日光浴、海水浴、マッサージ、ウォーキングといった治療が毎日行

われていた。リゾート施設ではレクリエーション活動もなされ、それらはスポーツ的な活動と文化的活動が含まれていた (ibid)。バウチャーの値段には三種類あり、それぞれ普通のバウチャー(九〇―一五ルーブル)、上級のバウチャー(一四〇―一七〇ルーブル)、最高級のバウチャー(二〇〇―二二〇ルーブル)であったが、いずれも簡単に買うことはできなかった。

四．A氏のライフヒストリー

キルギスに限らず、これまでポスト社会主義国における社会体制と観光の関係について、具体的かつ詳細に報告した研究は行われていない。そのため本稿では、社会体制の変化がどのようにして観光の変化と関係しているのかを、社会主義体制経験者であるキルギス在住のある人物A氏のライフヒストリーを紹介することにより描き出す。すでに述べたように、キルギスにおける温泉施設は、ソ連時代は労働で成果を上げた人しか行けず、温泉施設へのバウチャーの割り当てはソ連の首都モスクワで行われていた。A氏は、ソ連時代とソ連崩壊以降の九〇年代温泉施設のバウチャーを入手し、頻繁に温泉施設を利用できた人物である。そのため彼のライフヒストリーをキルギスの社会史と

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

観光史の中に位置づけることは、社会体制の変化により温泉施設の利用がどのように変化していったのかを理解するための興味深い事例研究になると思われる。

四一・一 社会主義時代におけるA氏の休暇と「観光」

四一・一・一 子供時代

A氏は、一九五二年六月一日に、キルギスのナリン(Naryn)州コチュコル(Kochkor)地域クズドボ(Kyzyl-Dobo)村¹⁵のキルギス人一家の九人兄弟の長男として生まれた。彼の父親は第二次世界大戦での兵役後、クズドボ村の学校（小学校から高校までの一貫校）でロシア語と技術の科目を教え、夏休みには村の家を作る設計・施工の仕事をしてきた。母親は専業主婦であった。これらのことは、彼の父親が村の中では知識階級に属していたことを示している。

A氏は、一九五九年九月一日に一年生（日本の小学校一年に相当）に入学し、それから三年間一九六二年五月まで同村の学校に通った。一九六二年九月から一九六八年五月まで、つまり四年生・九年生（日本の中学校三年に相当）まで首都フルンゼ(Frunze, 現ビシュケク)の父の弟

の家で暮らしながら勉強した。父親の一番下の弟であるA氏の叔父にあたる人が首都で仕事をしており、A氏を含む自分のオイたちを自分の家で住み込みさせ、勉強させたからである。A氏の父親は三人兄弟の長男であり、村にいる一家の子供たちにより良い教育をさせることを望んでいた。一〇年生の時の一九六八年九月から一九六九年五月まで、地元のナリン州コチュコル地域クズドボ村に再び戻り、卒業した。このように、A氏の家族は教育に熱心な家族だったことが伺える。

A氏は学校一年生から四年までの夏休みは、親と一緒に親戚の草原のジャイロー(jalozoo)¹⁶に行つてテントで生活し、馬乳酒を飲んだり、馬に乗ったり、羊の骨で遊んだりした。最も楽しかったのは草原にいる近所の子供たちとレスリングや羊の骨で遊んだことであつたという。また、草原で暮らしている家族たちは、一〇・一五日ごとにお互いの家を訪問し、順番に一頭の羊をさばいて食べていた。そのためこのような時に自分の家に客が来たとき、あるいは近所の家に呼ばれていったときに甘いキャラメルやクッキーなどのお菓子も食べられたのがうれしかったという。当時、草原の人々にとって砂糖の入つたお菓子は貴重な食べ物だった。

五年生から七年生までの三ヵ月間の夏休みは、村の羊の

毛を刈る時期「クルクン」(күркүн)にあたり、一シーズン(二カ月)一五〇ー二〇〇ルーブルでコルホーズやソフホーズで毛を運ぶ仕事のアルバイトをした。稼いだお金(当時、小麦粉五〇kgが一三ルーブルから一四ルーブル)は親に渡し、そのお金で親が新学期のための洋服や文房具を買ってくれた。夏休みの残りの一カ月は、実家の三〇アール(三〇〇〇m²)の庭の草刈仕事を手伝ったり、空いている時間に友達と遊んだり、上記の親戚の草原に行ったりして過ごした。七年生から九年生まで(日本の中学校にあたる)の夏休みも、上記の草原に行つた以外は、実家の草刈仕事や家畜(馬一頭、牛一頭、羊一〇頭)のフンから燃料を作つて過ごすなど、肉体的な仕事で家族の長男として責任を果たしていた。以上のように、A氏の家族は知識階層に属してはいたが、決して経済的に裕福でなかつたことが想像できる。

A氏は、小学校高学年から高校終了まで、親元から離れて叔父の家に住みながら首都の学校で勉強したこともあり、一九六九年九月に首都フルンゼ(現ビシユケク)のキルギス医科大学に入学し、一九七五年七月まで勉強した。一般の奨学金は二八ルーブルであったが、A氏は熱心に勉強し、成績優秀者であったため最も高い奨学金五六ルーブルをもらっていた。そして、クラスの学級委員長も務めた。

四一・二 大学生時代の休暇

A氏は、大学生時代は、二カ月の夏休みの間に、二〇人・三〇人の大学生グループで「建設チーム」(сипуу омпса)に参加した。「建設チーム」とは、コルホーズやソフホーズに行つて家畜小屋(кочар кошар)を作る仕事であった。もう一つの休暇方法は里帰りであった。実家に帰省して、草刈りや草集めをしたり、家畜のフンで燃料を作つたり、家や家畜の小屋などの建設がある場合はレンガを作つたりするなど家族の一員として責任を果たした。

「建設チーム」にはいくつかグループがあった。二〇人・三〇人の大学生グループごとに、全体の仕事を指導しチェックする司令官がいた。この司令官は各大学に付属していたコムソモール機関(Комсомольская организация комсомольская организация)の代表であり、実質的には共産党職員であった。司令官は学生たちがノルマをどのようにして達成しているかをチェックしていた。このように、各グループに司令官がいたことから、厳しい監視の下での仕事であったことが理解できる。「建設チーム」には誰もが行けるわけではなく、自分の意志で真剣に働きたいという者が集められた。A氏は四年間「建設チーム」に参加した。A氏の当時のスケジュールは、朝七時に起床し、

朝食（建設チームに参加している二人の女性が作ってくれる）を食べて、九時から夕方の六時まで仕事をするといいものであった。仕事は、小屋を作るための原料のセメントを混ぜたりセメントを運んだりすることであって大変だったとのことである。だが各グループで競争しながらノルマを達成し、勝ったグループが負けたグループより高報酬プレミアムという特別な給料をもらえるなど、ゲーム感覚であったため大学生の労働に対するモチベーションの一つにもなっていたようである。仕事が終わると仲間でギターを弾いて歌を歌って過ごすなど、当時、あまり娯楽のない社会主義社会の中で学生が自分たちで楽しみを見つけていたことが伺える。A氏は、「建設チーム」によって一シーズンで二〇〇ー三〇〇ルーブルをもらい（当時、小麦粉一袋五〇kgが一三ルーブルから一四ルーブルであった）、このお金で、自分の新学期のための洋服代や文房具代などを買っていた。

以上のように、A氏は一〇カ月間首都で毎日勉強していたため、建設チームでは監視された重労働に従事していたにもかかわらず、村落で仲間とともに休暇を過ごすことに楽しさを見出していた。そのため、大学生にとっては村落での労働と学生間の交流がささやかな休暇方法だったことが伺える。当時は社会主義の管理されたシステム下にあり、

現在のように自由に温泉施設に行くことができなかった。

四一―三、秋の休みと仕事

A氏は大学生時代、秋期の九月一五日から一月一五日までの二カ月間、他の大学生たちと一緒に収穫を手伝いに農業労働（*Сельскохозяйственная работа*）に行っていた。大学のキュレーター（各グループを担当する一人の教員）や他に手伝ってくれる教員たちも同行した。農業労働では医学大学、女子教育大学、そして国立大学といったキルギス共和国の上級大学がキルギス南部のジャラル・アバッド地域の綿の収穫に行き、それ以外の大学は首都に近い地域の村落に赤カブとジャガイモの収穫に行った。上級大学はジャラル・アバッド地域に汽車で二日間かけて行き、汽車の中で友達と遊んだり、歌ったりして長い時間を過ごすなどの魅力があったという。このことから、遠い地域に行くのは上級大学生の特典であり、政府が大学のレベルによって差をつけていたことが伺える。

農業労働は綿をとる仕事で収穫ノルマがあった。一日の量は一人当たり四〇―五〇kgで、給料は一〇日間か一五日間ごとに働いた分量によってもらっていた。ノルマ以上働いた場合はプレミア賞金がもらえる制度があり、A氏は

五〇一六〇ルーブルをもらい、その中から食費も払っていた。宿泊はコルホーズが用意してくれたシイパン(Shy-pam)と呼ばれる小屋で無料だった。食事は学生の中から希望する者が担当となり作っていた。

A氏はこの仕事に四年間行つた。仕事は綿の収穫がわかる者にとっては難しくないが、やり方がわからない人の中には腰を痛めた者もいたという。だが仕事後は皆と一緒に映画やコンサートを見に行くなどして楽しかったという。このような際にお互いに関わり合い結婚したカップルも多かった。また、雨が降ると綿を収穫できないので友達と一緒にウズベキスタンのアンデジャンやサマルカンドを見に行ったりした。このことから、勉強のないこの二カ月間の秋の仕事は、観光することもでき、なおかつ上級大学の学生としての名声にもつながったことが理解できる。

A氏は、大学生時代の一九七三年一月二二日に結婚し、同年一月二八日に長男が誕生した。結婚後、二年続けて一月と二月に月二回程度、勉強の時間が終わってから、ピシュペク(Thauner Pishpek) 駅に行き、四・五人で石炭の台車を列車から下すアルバイトをして家族のための収入を得ていた。石炭台車一台分の料金は二・一五ルーブルで、副収入として助かっていたという。

当時は勉強しながら子供を育てるのが難しかったため、

夏休みになると長男を実家があるクスルドボ村に連れてゆき両親に預けた。A氏は結婚後、夏休みの「建設チーム」には参加しなくなり、夏期中は実家の仕事を手伝ったり、家族を養うためにアルバイトをしたりするようになった。「結婚」というライフステージによって、A氏の休暇の過ごし方は変化していったと考えられる。

四一四 就職以降の休暇と観光

A氏は、一九七五年七月に首都フルンゼ(現ビシュケク)のキルギス医科大学を卒業し、一九七五年八月二〇日にソ連保健省の命令により、キルギスの七つの州のなかで最大の面積を持つナリン州のジウムガル地区の地区衛生伝染病管理センターの部長・医師に任命された。ジウムガル地区はナリン州の五つの地区の一つで、首都から遠い距離にあるが、当時、このような開発が遅れている地区のレベルを向上させるため、首都で卒業した学生が派遣されることになっていった。A氏は就職以降の様子を次のように思い出している。

「当時、ジウムガル地区では水道がなく、きれいな水がなく、灌漑溝から水を飲むため、下痢をする人の割合が高かった。私の仕事は地区住民の家、学校や

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

保育園、食堂や店などの病気の検査、チェックであった。こういった状況の難しい地区で働くのが大変だったが、たくさんの経験ができてよかった。しかし、仕事が忙しいため長期休暇も取れなくて、休暇施設に行くなどはできなかった。」

そして、温泉施設のバウチャーに関し、A氏は以下のように述べた。

「私が温泉施設へのバウチャーをはじめて手にとったのは、ジウムガル地区の仕事で成果上げたのが国に認められ、一九七八年一二月にナリン州の中国との国境線にある、首都から遠いアト・バシ地区の六〇人のスタッフが勤務する衛生伝染病管理局の主任に転職し、五年間働いた後のことで、就職して八年目の一九八三年のことであった。さらに、仕事で成果を上げたため、当時、選ばれることが難しいとされていた共産党メンバーにもなれた。温泉施設への休暇は二週間で、イシク・クル湖畔に位置するゴルボイ・イシク・クルという温泉施設（クコロト Kurort）に妻と一緒に行った。このようにして、私の努力が認められたときは嬉しかった。」

これらのことから、ソ連では厳しい労働管理が行われたことが理解できるが、仕事で成果上げた者には報償と

して温泉施設へ「観光」が与えられたことが伺える。さらに、A氏は夏になると、病気発生が多く仕事が忙しくなることから、夏は長休暇が取れず、温泉施設に秋の十一月にしか行けなかったことも、当時の状況を物語っている。

温泉施設での過ごし方についてA氏は次のように述べている。

「温泉施設では、朝八時から九時までは朝食（自炊ではなく、パン、おかゆ、チーズやソーセージなどの温泉施設で用意された健康的な食事）、九時から二時まで様々な治療（物理治療、マッサージ、温水プールあるいは温泉バスタブに一〇分だけ入る治療、泥治療）をして、一三時から一四時までは昼食を取った。一四時から一六時までは寝たり、横になったりした。一六時におやつ（ヨーグルトや甘いパン）、一七時から一八時までは自由時間で散歩して、一八時から一九時までは夕食の時間、そして、一九時から二二時まで自由時間であり、温泉施設での私と同じく仕事で成果を上げて休暇している人と交流していた。四・五家族が二日に一回、順番にお互いの部屋でお茶を飲んだり、ご飯を食べたり、チェスをしたりした。また、温泉施設滞在中、友達や親戚、または部下や後輩の人が訪ねて来ることがあつ

た。その際、訪問客が持って来てくれた一頭分の煮た羊の肉、パン、ピラフ、麵、お菓子類やお酒を私は妻と二人だけで食べきれないので、温泉施設で交流している人達と一緒に食べたり飲んだりした。交流した人達と仲良くなって、温泉施設で楽しい時間を過ごした。また、お金を払って、現地を廻る遠足にも行った。」

これらのことから、A氏の温泉施設での滞在の楽しみは、温泉、泥治療、物理治療やマッサージを受けることや、現地を廻る遠足に行くことなど、いわゆる「観光」だけではなく、同じく仕事で成果を上げた人達と夏の仕事を終えてリラクセスして交流することだったことが伺える。

「温泉施設の他に、休暇の時に、先輩の共産党アト・バシ地区一等書記がカザフスタンで共産党に関する勉強をしていた際に、カザフスタンに誘われ妻と一緒に一九八一年と一九八六年にそれぞれ三日間滞在したことがあった。アルマアタ市内観光の他にスケート場やスキー場に行った。また、たまに夏の土日だけに、イシク・クル湖近辺の友達や親戚のところ泊まり、湖に入ったりして、休日を通じた。だが殆どの場合、夏の七、八月は病院の仕事の他に、草刈りの仕事もしなければいけなかった。一カ月で

史苑（第七五卷第二号）

四〇haの草を刈る計画を実行するまでは、その村にテントを持って行って泊まっていた。私の部下たちは順番で長休暇をとることができたが、上司であった私は長休暇を取らず草刈の仕事もやった。さらに、冬は高い山のところで牧畜している人々を訪ねて、ご飯があるか、郵便が届いているか、家畜の餌はあるか、医療援助が届いているかを確認するといったこともしていた。」

以上のことから、A氏が共産党メンバーの友達を訪れる理由で隣の国に行ったり、土日に湖に行ったりするなど、この時期にも「観光」が行われていたことが見て取れる。一方、夏でも冬でも責任をもって病院の仕事や共産党の仕事もこなしていたことが分かる。さらに、ソ連のシステムは計画経済を行っていたことがA氏の生活にも影響を与えていたことがうかがえる。ソ連時代には中央で政府方針としての五カ年経済計画が立案され、これが「ノルマ」という形で企業に指示される仕組みになっていた。工場の企業長の最大の任務は「ノルマ」の達成であった。ノルマの達成率が、中央機関からの成績を決定し、達成できない場合企業長は従業員からも批判の対象ともなる。賃金も企業のノルマから各職場のノルマ、個人のノルマによって決定され、ノルマの達成率、すなわちノルマを超過して達成する

ことに応じて、収入が増えるような制度になっていた。従って、ある企業がノルマを達成できない場合はそれだけ収入が減った。これに関し絵野沢（一九六五）は、ソ連の能力主義の思想が徹底した人的能力中心の社会機構と、アメリカの能率を中心とする生産機構とは全く同じものであり、ソ連においては能力主義の給与体系であり、能力のあるものは収入が多いのだと指摘している。だが、A氏の話によるとソ連時代の平均給料は七〇・八〇ルーブルだったが、五〇kgの小麦粉一袋が一ルーブル、マッチは一コペイカで買ったため、どの社会地位の人も苦勞しなかつたことが理解できる。このことから、高い給料ではなく、国民の報酬として温泉施設や休暇施設への可能性を与え、ソ連政府が国民をうまくコントロールしていたことが伺える。

「私がアト・バシ地区でも成果を上げたことから、さらにもっと遠い地区であるアク・タラー地区の地区セントラル病院の院長に転職し一九八三年、一九八六年まで三年間働いた。その後一九八六年一月に、ナリン州の一番大きい地区（人口五万人）であるコチュコル地区の地区病院が遅れているから、そこで働いて欲しいと言われ、主医として転勤し一九九〇年まで働いた。その結果、一九八七年に「ジェティ・オグズ」という温泉施設にバウチャーをもらっ

て行った。その他に、一九八九年にモスクワで開かれた第一回ソ連全国の医療会議に私と他の六〇人の人が出席した際にモスクワ市内観光したことがあった。同年、私はウクライナのキエフ市に研修に行くことになり、研修が終わる頃に妻を呼び寄せて二人で観光し、とても楽しかった。」

このような説明からは、ソ連民は仕事や勉強の理由からモスクワを訪れる必要があつたと同時に、ソ連政府がこのような方法でも国民に「観光」を与えていたことが理解できる。

その後、ペレストロイカが実行され、一九九〇年には民主的な国会議員選挙を行うことになり、勤務先の病院から選挙に出るよう勧められたA氏は七人選挙の中からコチュコル地区民に選ばれ、議員になり一九九五年まで務めたと同時に、一九九一年の二月にA氏は、ナリン州レベルの保健管理局局長に選ばれた。

四・二． 独立後の資本主義への移行と観光

キルギスは一九九一年八月三十一日に独立を宣言し、世界二〇〇カ国の承認を得、翌年五月憲法を制定、同時に初めてキルギス通貨を発行した。しかし、独立後の数年間は、

キルギス経済にとって非常に苦しい歳月であった。とりわけ、市場経済はかつてない衰退を招いた。一九九二年～一九九五年間には工場と農業面での生産は大幅に下落した(秋吉、二〇一七)。

ソ連時代には政治や経済に関する事柄は中央部のモスクワを中心に計画され、それを実行するのがキルギスを含む一五の各国であったが、ソ連崩壊後は独立した国々が自力で発展方向を決めなければならなかった。キルギスは、経済政策の一つとして観光推進を決めた。同じく独立したカザフスタンやウズベキスタンに存在する天然ガスや石油といった天然資源がキルギスには存在しないため、キルギスは自然資源を生かした観光を推進することにより経済を発展させようとしたのである (Anderson, 1999)。現在のキルギスにあたる地域は、ソ連時代から「辺境地」としての扱いを受け、基本的に農業畜産地域として位置づけられてきた(岩田ほか、二〇〇八：二九)。一九九一年の独立後、キルギスは市場経済化を進めているが(岩崎、二〇〇三)、森はキルギスの市場経済化は失敗であったと主張し、キルギスが深刻な貧困に悩んでいることは国際支援機関の間で広く認識されていると述べる(森、二〇〇八 b)。市場経済化の失敗を克服するためには持続的経済発展が不可欠であり(森、二〇〇八 a)、観光開発および地下資源開発は、

キルギスの経済発展に欠くことのできない重要な国家戦略として位置づけられている(岩田ほか、二〇〇八：二九)。

だが観光に関する法律はソ連崩壊後直後には存在せず、一九九九年になってから「観光に関する法律(Law of Tourism)」が制定され、それ以降ようやくキルギスでは観光による外貨獲得の議論が盛んになった(岩田ほか、二〇〇八：二九)。二〇〇七年四月には観光庁(State Agency on Tourism)が独立機関として設置され、観光に力を注ぐようになった(ibid)。その結果、キルギス共和国の国内総生産(GDP)への観光の寄与は、一九九一年の〇・二%に対し、二〇〇四年には四・七%に上昇した。比較対象として隣国をみると、カザフスタンとウズベキスタンのGDPに占める観光の割合はいずれも1%未満であり、タジキスタンでは〇・二%にすぎない(Almalykchykov, 2005)。

だが独立以降、キルギスでは市民格差も生じ、それは観光にも反映された。A氏は資本主義以降の温泉施設へのパウチャーについて次のように述べている。

「ソ連時代、私は労働組合の温泉施設のパウチャーは総額の10%だけを支払って入手していたが、ソ連が崩壊してからは30%を払わなければならなくなった。さらに、ソ連崩壊直後、温泉施設の状態も

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

悪化し、温泉施設が電気やガスの料金を支払えない、温泉や泥治療を行えないなどの問題が発生したため、しばらくの間温泉施設には行けなかった。」

このことから、労働者が温泉施設を使用できない程、労働者らの休暇にも変化が生じ、独立以降の観光推進化は温泉施設の利用にまで及んだことが理解できる。

「しかし、一九九五―一九九六年頃から資本主義への軌道に乗り、国の状況が良くなってきて、バウチャーが国↓州↓地区レベルでの順番で再び配られるようになった。だが相変わらず一つの地区の機関に一年間で最大一〇人に配られるといったように数に制限があった。」

これらのことからみると、ソ連が崩壊した直後でも、業者に報償として与える温泉施設への「観光」に関しては金額に多少の変化はあったが、制度自体には変化がみられない。しかし、ソ連時代に労働組合が管理していたジャラル・アバッド (*Жалал-Абад Jalal-Abad*)、イシクアタ (*Ысык-Ата Ысык-Ата*)、ジェルガラシ (*Джеңгалин Jengalin*)、ジエティ・オグス (*Жети-Огуз Jeti-Oguz*)、キルギスタン (*Кыргызстан Кыргызстан*)、ゴルボイ・イシク・クル (*Голубой Исык-Куль Goluboi Issyk-Kul*) という温泉や泥治療を提供している温泉施設の温泉治療

や、泥治療がないオシユ (*Ош Ош*)、アラトオ (*Алатоо Ala-Too*)、チョルボンアタ (*Чолмон-Ата Чолмон-Ата*) というリゾートや休暇ホーム、およびアルスタンバプ (*Арстанбап Arstanbap*) とごうベンションを管理している管理局が、二〇〇九年に「キルギスリゾート観光管理局」 (*Управление Кыргызкурорттуризма*) という新たな名前のファンズとして誕生し、就業者の温泉施設や休暇ホームへのバウチャーを配布することになった。新たな制度では、ファンズの会員は保険料として給料の〇・二五％―一％を管理局に支払う。バウチャーを一〇％―三〇％で購入するシステムは以前とかわらないが、二〇〇九年からはリゾートを労働組合の会員ではない一般人にも公開し、温泉施設や休暇ホームを観光施設として自由化した。つまり、キルギスリゾート観光管理局から買わなくても、温泉施設の現地に行けばバウチャーを購入でき、温泉プールや風呂を利用できることとなったのである。また、馬乳の時期（五・六月）になると、温泉施設に宿泊だけを目的として訪れる人もいる。さらに、浴室のバスタブに温泉水がでる部屋や、部屋まで食事の配達や部屋でのマッサージ受診サービスができるなどの上級クラスの部屋も現れるようになった。このように地位が高い人や富裕層しか利用できない部屋やサービスがあるということは、キルギスの温泉施

設にも資本主義に特徴的な格差が生じたことを意味する。A氏も、一九九一年から一九九九年まで国会議員と同時に一九九一年から二〇〇〇年までナリン州保健管理局局長、二〇〇〇年から二〇〇五年までナリン州議員会会長といった高い地位であったため、温泉施設の上級階級を対象とする部屋に滞在できた。

一方、障害者や年金生活者は労働組合管理の温泉施設や休暇ホームを無料で使用できたが、ソ連時代も現在も、労働組合からではなく社会保護省からバウチャーが分配されている。このように、温泉施設の利用も幅広く変化したのだといえよう。

さらに、一九九一年―二〇〇五年の間には、キルギスの公共施設の七〇％が民主化され、いくつかの公共施設は自治体や個人の所有に移管された (Ibragimova, 2007)。または、ソ連時代にはまだ開拓されていなかったイシク・クル湖周辺の土地も開発されたため、イシク・クル湖畔は民宿から高級ホテルにいたるまで幅広い観光施設が建設された。その結果、キルギスでは土日や休暇の際に湖に行く、あるいは長休暇に行くことが一般化した。

「温泉施設の他に、私は家族と一緒に、一九九一年からジャイローに毎年行くことになった。ソ連時代にソフホーズで国が所有する羊を飼育し、私と同じく

仕事で成果を上げたため区民に認められ国会議員になった人と友達になった。ソ連が崩壊してからは個人で馬を飼えるようになり、彼は私を草原に招待してくれるようになったため、毎年訪れ、現在までにいたる。」

このことは、ソ連が崩壊することにより、温泉施設を対象とした観光が誕生した以外にも、「草原観光」が始まったことを示唆している。ソ連崩壊直後には「草原観光」はA氏のような上流階級の人々しかできなかった休暇の一種であったが、現在のキルギスでは「草原観光」が盛んになり、海外からの旅行者が訪れるほどの観光資源になりつつある。

A氏は、一九九五年に、キルギスの英雄マナス (Manas) の一〇〇〇年記念が祝われた際、「マナス一〇〇〇」賞を受賞した。また一九九六年に国の大統領賞、一九九九年には名誉医者称号を受けた。さらに、キルギス独立以降は国会議員として医療関係の出張にも行った。それら、キルギスで医療改革を行うことを目的としていた。まず一九九二年に国会議員としてトルコに出張し、その後一九九三年はドイツに保健管理システムの視察のために訪れ、一九九四年には医療関係の一カ月の研修でアメリカを訪れた。その後の一九九七年にスイス、一九九八年にはイ

ギリスとスウェーデンに医療や保健のシステムの視察のために訪れた。その結果、キルギスに民間の医療サービスやドイツ式自己負担の医療システムがもたらされ、ソ連式システムであったベッドの数に対して国家が援助する方式ではなく、患者人数によって国家が医療機関に援助するシステムが導入された。このようにキルギス独立以降行われたA氏の海外出張は、キルギスにおける医療や保健改革に貢献した。だが同時に海外出張の際の市内観光などは、ソ連時代には想像しがたかった海外への旅をA氏が体験したと考えられる。これは、ソ連崩壊がもたらした「自由」を示唆しているといえるだろう。

だが二〇〇五年にはキルギスでは州レベルの機関が廃止されたため、A氏もそれまで従事していた州レベルの仕事を失った。そのためA氏は首都ビシュケクにある保健省の国民保健部長に転任した。キルギスの社会体制の変化は三〇年間人生をささげたナリン州を後にしなければならぬというA氏の人生に大変化をもたらした。

また、二〇〇八年に「国家名誉年金生活者が三年間に一回無料のバウチャーをもらえる」という制度ができたことから、A氏も二〇〇八年に国家名誉年金生活者になったことが理由で、二〇〇九年までは、無料のバウチャーをもらって一回だけ温泉施設に行った。後に二〇〇九年にマネタイ

ゼーション（貨幣化）の法律が成立し、無料バウチャーの代わりのお金が年金額に加算された。その結果、A氏は、名誉年金生活者として一般より少しだけ多い年金をもらっているが、バウチャーをもらって温泉施設に行くことは出来なくなった。資本主義化したキルギス政府の観光政策によって、A氏の休暇には「温泉旅行」がなくなったのである。その結果、現在は長休暇中には、家族と一緒にイシク・クル湖の近くに親戚の家に泊まり、湖に入ったり、さらに、草原にも毎年一〇日間家族と一緒にいたりしている。これは社会体制の変化に伴って観光も変化したことを意味しているのではないだろうか。

以上、A氏のライフストーリーをキルギス現代史の中に位置づけてきた。前述のように、彼はソ連時代には休暇の時に自由に温泉施設に行くことが出来なかった。彼の仕事は、キルギスの七つの州の一つであるナリン州の中の成長が遅れているジウムガル地区での地区衛生伝染病管理センター長の任務から始まり、アト・バシ地区、アク・タラー地区、コチュコル地区といったナリン州の各地区を転任した。A氏によると、転任のたびに新しい地区のことや新たな人間関係を知り慣れるのは大変だったとのことである。だが成長が遅れている地区におけるA氏の仕事の成果が認められ、共産党メンバーになるとともにナリン州保健管理

局長、ナリン議員会会長、国会議員とまで成長し高い社会地位を獲得したことが理解できる。またA氏は仕事で成果を上げた報償として休暇の際の温泉施設への「観光」が与えられ、それが威信にもつながったことが伺える。さらに、社会地位が上がるたびに、温泉施設での滞在がリュックス(more)といったスイートルームに変わり、社会地位の変化によって休暇条件が変化していった。またA氏は仕事のついでにモスクワやウクライナまで観光するなど、長休暇の際に、ソ連領内の多くの温泉施設を使用したり、ソ連時代には共産党地区一等書記に誘われカザフスタンまで観光したりしていた。

しかし、社会地位が上がるのに従い休暇時に「観光」が出来たという現象には、社会的な要素があったのではないかと考えられる。それは、A氏が仕事上で付き合いを持った人物とその人たちに贈った謝礼品の存在である。A氏は共産党地区一等書記や三等書記とかなり近い関係結び、A氏が上の地位に転職するたびに、お礼として地位の高い共産党一等書記にモノを贈っていた。A氏は、これは決して賄賂ではなく、尊敬する人に感謝の気持を伝える為に贈っていたのだと説明する。通常はA氏自身が共産党書記の家を訪ねることはなく、A氏の妻がお礼の挨拶に行っていたとのことである。このことは、ソ連時代には妻が夫の

出世の為に行った行為ではないかと考えられる。つまり、休暇時に一定の人にしか与えられない温泉施設へのパウチャーや他の町への「観光」には、仕事上でのこういった深い人間関係が必要であったのではないかと推察できる。

しかし、資本主義化以降のキルギスでは、温泉施設へ行くことはすでに仕事の報償ではなく一般化され、経済的に余裕がある人しか行けなくなったため、市民の間に観光に関する格差が生じた。A氏も現在は年金生活をし、経済的な余裕がないことから、温泉施設に行けなくなった。だが同時に、キルギス独立後は、それまで認められなかった湖での休暇も一般化した。イシク・クル湖近辺にA氏の親戚の家があることもあり、A氏の観光もバウチャーを用いた観光から、自由に泊まれる「草原観光」や「湖観光」へと変化した。さらに、経済的に余裕がある人は独自に海外旅行をするなど、現在のキルギスでは観光の多様化が進行している。

五. 考察

以上、本稿では社会体制転換に生きたある個人のライフヒストリーを分析対象とし、キルギスにおける「観光」の変容について分析してきた。本稿が扱ったA氏のライフヒ

ストーリー対象期間は、A氏が生まれたソ連時代の一九五二年から独立以降の現在の二〇一四年であるが、ソ連という大きな枠組が七〇年存在したことから、分析の際にはソ連の歴史全体に注意を払う必要がある。

帝政ロシアの国家統治支配を受ける以前のキルギスにおける温泉の利用は現在とは異なっていた。温泉は中央アジアを始め中国やインドといった域外からの信仰者が訪れる神聖な場所であった。また、温泉はかつて遊牧民族であるキルギス住民が体を清めるために必要不可欠な場所であり、さらに現地住民が病気を治す貴重な病院代わりになっていた。しかし、以上のようなキルギスの温泉は帝政ロシアの植民地主義的支配という外部からの影響によって大きく変化していった。帝政時代のロシアの南下政策により赴任して来た国防省や役人のために、温泉や泥温泉の周辺、山岳部や溪谷といった場所に夏の休暇・治療用の施設が作られるなど、帝政ロシア政策により、キルギスを含む中央アジアの温泉利用が変化したのである。

さらにA氏のライフストーリーからは、キルギスの「温泉観光」に社会体制転換が与えた具体的な様々な影響が明らかになった。彼が生まれた一九五二年のソ連経済は難しい状況にあり、A氏も幼い頃から夏休みにアルバイトをして両親を経済的に支えなければならなかった。当時のソ連

はスターリンに指導者下にあった。一九五三年にスターリンが死亡し、政治環境が変化するが、スターリンが行った独裁体制はソ連の人々の生活の様々な面で大きな影響を残した。スターリンが指導者であった時期は弾圧の時代でもあり、シベリアの労働キャンプに送られた人々も存在したが、同時にこの時期、ソ連は貧困や経済の低迷、低い識字レベルから抜け出し、第二次世界大戦の勝者として経済大国となり、人々の生活水準も全体的に向上した（ダダバエフ、二〇一〇）。その後国民の生活に力を入れたのはブレジネフだった。多くの研究者は、ブレジネフが指導者だった時代（一九六四―一九八二）はソ連政治の発展という面では低迷期であったと結論づける（ダダバエフ、二〇一〇）その理由は、政治やガバナンスのあり方、政権と一般国民の間の関係、政治体制の本質などをこの時期の評価の基準にしているからである。しかしダダバエフは、一般国民は必ずしも政治体制等ではなく、むしろ生活水準という目線でその時代を評価するのだと指摘する。確かに、この時代にソ連全体の政治の中で、優れた政治制度が出来上がっていたとは言いが、その反面、一般国民の生活はそれまでにならないほど充実し、生活水準が上がった。多くの医療機関や教育機関が作られ、娯楽施設も建設された。そのように一般国民の生活が保障された事から、多く

の人々はソ連の政治イデオロギーが正しく、共産党主義的、社会主義的な新しい形の社会を作っていくことを心から信じるようになったのだとダダバエフは述べる(ダダバエフ、二〇一〇)。

A氏は大学生時代、秋になると綿花の収穫に行くのを強制されたが、働いた分の給料ももらえ、観光もできた。ここからは観光が自由にできる資本主義とは異なる社会主義体制下の観光のあり方を見て取れる。さらに大学生は皆奨学金をもらい、寮も無料で国から支給された。A氏によると、この時期には生活水準が良く、医療費や教育費などが無料であったため、日常生活で困ることはなかった。給料も生活必需品の価格と合っていたため、消費するだけでなく貯金することも可能だったとのことである。ブレジネフ時代にはキルギスの発展も進み、労働者のための温泉施設や休暇施設も増加した。そのためA氏もブレジネフの時代を一番良い時代であったと記憶している。

しかし、A氏のライフヒストリーからわかるように、ソ連時代には日常生活ではさほど困った問題は存在しなかったが、同時に、何らかの労働に従事していない限りこれらの温泉施設を利用することはできなかったのである。またこの時代には簡単に海外に出ることが出来なかった。国内旅行も国家や労働に関係する計画、あるいは親戚を訪ねる

といった理由がなければ難しかった。このことは、帝政ロシア時代にはトーマス・クックの影響により一般化していた海外旅行 (McReynolds, 2006) が中断したことを意味する。

この結果、社会主義体制下では資本主義社会のような自由な観光が不可能になったため、西欧社会とは異なる「観光」の姿が見られるようになったのである。その特徴とは、「労働」と「観光」が密接な関係にあったこと、およびそれらを国家が統制していたことである。この時代には社会体制と観光の形態が密接に関係していた。そしてそれは個人の観光の形態の変化からも見て取ることが可能なのである。例えば、社会主義体制時に国会議員や医者を務めた上級階級に位置するA氏は、労働の成果の報償として、国から家ももらい、ドライバー付きの車も仕事で使えることもできただけでなく、温泉に行ったり、仕事の際にモスクワやウクライナまで観光したり、長休暇の際に温泉施設を使用したりしていた。つまり、「温泉観光」をするには、労働しなければならなかったのである。さらに、労働も一般レベルではなく、成果を上げなければならなかった。

また、A氏はソ連時代に共産党書記と一緒にカザフスタンまで旅行に出かけていたが、それには打算的な意図があったようにも読み取れる。その理由は、社会的な上昇を

可能にしてくれる上司に対し、お祭りや転勤の際に感謝の念を表すためのプレゼントとして渡していた謝礼品が人間関係を強めていたのではないかと考えられるからである。社会主義では人間関係が「資本主義のお金」にあたり、さらに上層部との人間関係がよければポジションが上がり、それが温泉施設へのバウチャー入手に繋がることを意味していたと考えられる。これは、資本主義社会のように、経済的な余裕があればいつでも「観光」ができることとは異なっている。社会主義体制下の「温泉観光」は人間関係とも深く関係していたといえるのである。

また、A氏に子供は五人がいたが、毎回温泉に行く際に子供たちを妻の両親に預け、夫婦二人だけで「温泉観光」に出かけていた。このことには、「温泉施設」の訪問には夫婦の健康維持以外の目的もあつたことがうかがえる。「温泉施設」とは夫婦二人だけで共産党や労働の話をする場所でもあり、うかつに子供を連れていくと口を滑らす可能性があるため、あえて連れて行かなかったのだとも考えられる。ソ連時代、スターリンが残した監視されているという疑いの目が人々の考えに深く浸み込んでいたことが推測される。

ソ連崩壊直後からキルギスが国家として安定するまでは、温泉施設の利用のためにはソ連時代と同様バウチャー

を利用する必要があつた。二〇一四年現在も引き続きバウチャー形式が継続されている施設がある一方、近年ではバウチャーなしでも「温泉観光」ができるようになった。しかし、これは、A氏にとってはむしろ悪影響を与えた。その理由は、ソ連時代が労働での成果をあげれば国家から「温泉観光」が保障されていたことに対し、資本主義体制を選択したキルギス国家がA氏の「温泉観光」を保証できなくなったことを意味するからである。独立後のキルギスで資本主義化が進むことにより、ソ連時代とは異なり人々はお金を払えばいつでも温泉施設に行けるようになった。だがもらう給料の額と生活必需品の価格とが必ずしも釣り合うとは限らず、またソ連時代とは異なり現在では子供達の教育費等も自己負担する必要があるため、温泉施設に行くための金銭的な余裕がなくなった。この点で現在のキルギスにおける観光はソ連時代とは異なる状況に置かれることになった。つまり、国家が資本主義体制へ転換したことにより、「温泉観光」も資本主義化したのである。

他方、資本主義体制に転換したことによって、「海外旅行」といったソ連時代には出来なかつた自由な観光形態が現れたことにも注目できる。その他にも、資本主義化以降に大衆化された「湖観光」や、都市化とともに生まれた「草原（ジャイロー）観光」の自由化といった新たな観光形態

も誕生するようになった。A氏の「観光」も、社会主義時代の妻と二人だけでしか行けなかった「報償としての夫婦温泉旅行」から、バウチャーなどに頼らない「自由家族観光」に変化したのである。つまり、A氏の「温泉観光」の変遷には、彼のライフステージの移行はもちろん、国の社会体制が大きな影響を与えてきたのだと考えられる。

以上の考察から分かるように、A氏のライフストーリーから見たソ連時代の「観光」は、西欧社会の「観光」とは異なるパターンを取っていた。だが前述したように、従来の「観光」という現象を研究する際の大前提にあるのは資本主義に基づいた西欧社会であり、そしてそれは一つのステレオタイプに過ぎないといえるのではないだろうか。本稿でA氏のライフストーリーを資料とすることにより議論してきたように、社会体制転換に伴う「観光」の変容を理解するためには、従来のように資本主義に基づいた西欧社会を過度に観光の前提とするのではなく、観光する個人の経験を社会体制の変化の中に位置づける作業が必要なのである。しかしながら、本稿で紹介する事例は上級階級に属するA氏のライフストーリーにとどまっている。そのため今後は他の階級の人々のライフストーリーも検討した上で、キルギスにおける「観光」を包括的に理解し、ポスト社会主義国における観光史の特徴を明らかにする必要がある。

謝辞

本研究を行うに当たり立教大学観光学部教員の佐藤大祐先生からの指導を受けました。また、立教大学観光学部教員の市川哲先生からはフィールドワークの方法等を教わりました。二〇一四年六月、八月、一〇月に行ったキルギスでのフィールドワークではライフストーリーを語ってくれたA氏、温泉施設関係者および温泉利用者の方々から多大な協力を得ました。なお本稿が依拠する現地調査は公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成の二〇一四年度の援助を受けて可能になりました。関係者各位に心より感謝します。

参考文献

ロシア語・英語

- Азар В И (Azar V. I.) (1972) *Отдых трудящихся СССР*. Статистика.
- Александров В. А (Aleksandrov V. A.) (1931) *Курсы и ее курортные богатства*. Советская Азия.
- Алмакучков К.М (Almakuchkov K. M.) (2005) *Интегрированные маркетинговые коммуникации*

- как инструмент продвижения регионального туристского продукта-на примере курорта Иссык-Куль. *Маркетинговые исследования в туризме: Учебно-Практическое пособие*. ФФЭА Бишкек.
- Алымкулов Д. А (Алмткүлов Д.А), Саспеков С. (Saspekov S.) Симоненко Т.С (Simonenko T. S) и Алымкулов Р.Д. (Алмткүлов Р.Д) (2002) *Горно-рекреационные ресурсы Кыргызстана и использование их в курортно-оздоровительных учреждениях*. Кыргызско-Славянский Университет.
- Anderson J. (1999) *Kyrgyzstan: Central Asia's Island of Demotasyu?* Harwood Academic Press.
- Ашмарин (Ashmarin) (1934) О малоизвестных минеральных источниках Киргизии. *Сборник статей* Центральной сан.бак.лаборатории.
- Ахашкин Ю.А (1979) *Первые Декреты Советской Власти*. Советская Россия.
- Baranowski, Shelley, & Ellen Furlough (2001) *Being Elsewhere: Tourism, Consumer Culture and Identity in Modern Europe and North America*. University of Michigan Press.
- Бартольд В. В. (Bartoldt V.V.) (1897) *Отчет о поездке в Среднюю Азию с научною целью 1893-1894 гг.* Типография Императорской Академии наук 198.
- Bracewell, Wendy (2006) *Adventures in the Marketrace: Yugoslav Travel Writing and Tourism in the 1950s-1960s*. in Anne E. Gorsuch & Diane P. Koepker(eds.) *Turizm: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism*. Ithaca and London : Cornell University Press, pp.248-266.
- Денисов П.В. (Denisov P.V.) (1950) *Курортные ресурсы Кыргызской ССР*. Научно-популярная серия. Кир. ФАН СССР, 36.
- Eckford, P. K. (1997) *International Tourism Potential in Issyk-Kul Oblast the Kyrgyz Republic: Report and Analysis*. Madrid: WTO.
- Nofer, M., F. Peeters, W. Aeschbach-Hertig, M. Brenwald, Nolocher, D. M. Livingstone, V. Romanovski, and R. Kirfer (2002) Rapid deep-water renewal in Lake Issyk-Kul Kyrgyzstan indicated by transient tracers. *Limnology and Oceanography*, 47(4): 1210-1216.

- Gorsuch, Anne E. & Diane P. Koenker (2006) *Tourism: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism*. Ithaca and London : Cornell University Press.
- Koenker, P. Diane (2009) Whose right to rest? Contesting the family vacation in the postwar Soviet Union. *Comparative Studies in Society and History*. 51(2): 401-425
- Козлов И. И. (Kozlov I. I) (1986) *Здравниции профсоюзое СССР: курорты, санатории, пансионаты, дома отдыха*. Профиздат.
- McKeynolds, Louise (2006) The prerevolutionary Russian Tourist: Commercialization in the Nineteenth Century. In Anne E. Gorsuch & Diane P. Koenker (eds.), *Tourism: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism*. Ithaca and London : Cornell University Press, pp.17-42.
- Noack, Christian 2006 Planned and “wild” tourism on the Soviet Black Sea Coast. In Anne E. Gorsuch/Diane P. Koenker(eds.) *Tourism: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism*. Ithaca and London : Cornell University Press, pp.281-

304.

- Национальный Статистический Комитет Кыргызской Республики (2012) *Туризм в Кыргызстане 2007-2011*. Бишкек: Годовая публикация.
- Palmer, J. Nicola (2009) Кыргыз tourism at Lake Issyk-Kul: Legacies of Pre-Communist and Soviet Regimes. In Singh S. (ed.) *Domestic Tourism in Asia: Diver-sity and Divergence*. Taylor & Francis.
- Петросьянц А. (Petrosyants) (1926) *Курортное дело в Средней Азии*. Кыргызское Курортное Управление.
- Рычков Н. (Ryckov N) (1772) *Дневные записки путешественника в Киргиз-Кайсацкую степь в 1771 г.* СПб, 107.
- 日本語
 秋吉九紀夫 (二〇一一) 『遙かなる道程——中央アジアの動向』中国書店。
 アロートンクロフ、グリザット (二〇一三) 「キルギス共和国における温泉施設の発展と利用変化」立教大学大学院観光学研究科修士課程論文。
 有末 賢 (二〇一一) 『生活史宣言——ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会。

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコウ）

石川晃弘（二〇〇九）『体制転換の社会学的研究—中欧の企業と労働—』有斐閣。

岩田修二・渡辺悌二・マクサトアナルバエフ（二〇〇八）

『キルギス共和国の自然保護地域と観光開発』『地理学評論』第八三号、二九—三九頁。

絵野沢喜之助（一九六五）『訪ソ特殊鋼視察団報告講演—経済、労働について』鉄と鋼第。

金田辰夫（一九九五）『体制と人間—中央アジアの小国の再生』日本国際問題研究所。

小池洋一・足羽洋保（一九八八）『観光学概論』ミネルヴァ書房。

櫻井 厚（二〇一二）『ライフストーリー論』弘文堂。

セミノノフ、ペー・ペー（樹下節訳）一九七七年

『天山紀行』河出書房新社。（Семенов-Тянь-Шанский, Петр Петрович Путешествие в Тянь-Шань）

ダダバエフ、タイムール（二〇一〇）『記憶の中のソ連—中央アジアの人々の生きた社会主義時代—』筑波大学出版会。

中野 卓（一九九五）『ライフストーリーの社会学』弘文堂。

前田勇（一九九二）『現代観光総論』学文社。

森 彰夫（二〇〇八a）「キルギスの産業再生の政策課題」今井正幸・和田正武・大田英明・森 彰夫『市場経済下の苦悩と希望—二一世紀における課題—』彩

流社、一〇九—一二八頁。

森 彰夫（二〇〇八b）「キルギスの重債務貧困国

（HPD）イニシヤティブ申請問題」今井正幸・和田正武・大田英明・森 彰夫『市場経済下の苦悩と希望—

二一世紀における課題—』彩流社、一三〇—一五〇頁。

湯澤規子（二〇〇二）「結城紬生産に見る家族経営とその変化—機屋の女性三代のライフストーリーからの考察—」『人文地理』第五四巻第二号、二二—四五頁。

湯澤規子（二〇〇二）「結城紬生産地域における家族内分業の役割—織り手のライフストーリーからの考察—」『地理学評論』第七四巻第五号、二二九—二六三頁。

新聞記事

Жумабаев Бекин, Ажибеков Абдылда (2011)

Элдик куроогтор элге кайрылабы же. Кыргыз Руху.

(1) キルギスにおける温泉施設は、キルギス語とロシア語ではクロールト (Курорт) と呼ばれ、温泉、泥治療、マッサージや物理学治療を提供している施設である。本稿ではこれらの総称として「温泉施設」という表現を用いる。

(2) これまで筆者はソ連時代後半および独立後のキルギスにおける温泉施設の発展や利用変化を、利用者の集客圏、客層、利用季節などの観点から明らかにしてきた。その際に聞き取り調査で得たデータや温泉施設のカルテを分析対象とした。キルギスの温泉施設はかつて社会主義イデオロギーのもと、労働者のために造られた。現在でも、ソ連時代の構造をそのまま残す「アルティン・アラシヤン」のような温泉施設もある。山間部の自然が豊かな地域にあるアルティン・アラシヤン温泉は、外国人観光客にとっては人気がある (アコマトベコワ、二〇一三)。一方、一九七九年に建設された「オーローラ」のような温泉施設は理学治療 (レーザー治療と電気泳動治療、スコットランドシヤワーなど) が導入され発展し、良好な立地条件により上級階級者のみが利用した温泉施設もあるが、キルギスが資本主義体制へと路線を変更したため、かつて上級階級のみ利用した温泉施設は一般公開され、職業に関係なく利用できるようになった。だが依然として宿泊料金が高いため、現在も高所得の人しか宿泊できない (アコマトベコワ、二〇一三)。しかし、低所得の人が外来で温泉治療を含む好きな治療を受け、日光浴や湖浴を利用している。さらに、キルギス政府の経済政策の一つになっている観光政策により、キルギスの温泉施設では、外国人誘致の対策もなされている (ア

コマトベコワ、二〇一三)。

- (3) 遊牧キルギス人の組立て式の家屋であり、五、六人が二時間程度で組み立てることが出来る。
- (4) ロシア語・キルギス語で Петросянци と綴るが、本稿では英語表記とする。
- (5) ロシア語・キルギス語で Апшарин と綴るが、本稿では英語表記とする。
- (6) ロシア語・キルギス語で Жумабаев と綴るが、本稿では英語表記とする。
- (7) キルギスの南、ジャラル・アバド州位置する。
- (8) キルギスのテンシヤン山脈の北側に位置するチユイ州、イシク・アタ渓谷の中に存在する。
- (9) テンシヤンスキー (Пер Петрович Семенов-Тин-Шанский Semjonov-Tyanshanskiy, 1827-1914) は帝政時代のロシア人研究者であり、1856年にヨーロッパ人として初めてテンシヤン山脈に登頂し調査を行った。一八五九年に出版された *Zemlevedenie Azii* (アジアの地理) により、キルギスの温泉は帝政ロシアやヨーロッパに知られるようになり、キルギスの温泉利用も変化したと考えられる。
- (10) ロシア語・キルギス語で Александров と綴るが、本稿では英語表記とする。
- (11) リゾートや健康療養に関する専門家。名前は Козлов と綴るが、本稿では英語表記とする。
- (12) 工場労働者やサービス労働者 (運転手、掃除婦など)。
- (13) 医者や教職員、公務員や政府幹部も含む。
- (14) ロシア語・キルギス語では Даар と綴るが、本稿では英語表記とする。

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）

(15) ジャイローとは、夏季に山岳部でのテントに一〇日程度滞在し、馬乳、馬乳酒、牛乳製品、羊の肉などを食べたり、馬に乗ったりして休暇を過ごす場所である。

(16) しかし近年、キルギスでは豊富な地下資源が埋蔵されていることも明らかにされ、多くの先進国が注目し始めている。

(17) マナスはキルギスに伝わる叙事詩である。また、その主人公たる勇士の名でもある。

（本学大学院観光学研究科博士課程後期課程）



図 1 キルギス地図

出所：<http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Kyrgyzstan/index.htm>



写真1 キルギス、ジェティ・オグズ *Jeti-Oguz* 温泉施設（1930年）

出所：Aleksandrov（1931）（キルギスのリゾート）*Курорты Киргизии* より転載。



写真2 イシク・クル湖のコイサラリゾートの湖畔と日光浴（1930）

出所：Aleksandrov（1931）（キルギスのリゾート）*Курорты Киргизии* より転載。

表1. キルギスへの国別外国人観光客数

国名	2010年		2011年	
	人数	%	人数	%
カザフスタン	837,609	63.64	1,437,739	46.16
ロシア	132,493	10.07	1,020,102	32.75
ウズベキスタン	140,644	10.69	433,363	13.91
タジキスタン	121,058	9.20	99,552	3.20
中国	18,167	1.38	25,059	0.80
トルコ	11,098	0.84	15,237	0.49
アメリカ	7,473	0.57	12,878	0.41
ウクライナ	1,525	0.12	9,074	0.29
ドイツ	6,980	0.53	8,432	0.27
アゼルバイジャン	984	0.07	3,983	0.13
韓国	4,207	0.32	3,681	0.12
フランス	2,105	0.16	3,633	0.12
イギリス	2,716	0.21	3,127	0.10
イラン	1,574	0.12	2,646	0.08
日本	1,125	0.09	2,435	0.08
スイス	1,029	0.08	2,147	0.07
パキスタン	2,082	0.16	2,044	0.07
インド	1,725	0.13	1,990	0.06
カナダ	1,669	0.13	1,904	0.06
ベラルーシ	517	0.04	1,685	0.05
イタリア	902	0.07	1,427	0.05
オーストラリア	1,189	0.09	1,375	0.04
アルメニア	293	0.02	982	0.03
グルジア	610	0.05	898	0.03
スウェーデン	527	0.04	808	0.03
イスラエル	586	0.04	744	0.02
ポーランド	524	0.04	713	0.02
ベルギー	426	0.03	592	0.02
オーストリア	536	0.04	510	0.02
アフガニスタン	404	0.03	493	0.02
トルクメニスタン	4,902	0.37	306	0.01
合計	1,316,207	100.00	3,114,372	100.00
*永住やスタッフ除く				

出所：「キルギス統計局 2012 年報告書」より著者作成。

表 2. キルギスにおける温泉に関する主な研究

年	研究者	内容
1874	Feoktistov, N. B. Teih	アク・スウ温泉温度, 成分
1875	I. V. Mushketov	アク・スウ地域の地質
1877	タシケント化学研究所	ジャラル・アバド温泉成分
1880	N. B. Teih	イシック・アタ温泉成分や放電
1885	Piper&Shapiro	ジャラル・アバド温泉成分
1897	Dranitsyn	ジャラル・アバドドリゾートの位置, その衛生状態, 温泉の特定の病気への効果や温泉の利用方法など
1900	S. Volkenshtein	アク・スウ温泉排水
1908	K. I. Argentov	ジェティ・オグズおよびアク・スウ温泉成分
1909	K. I. Argentov	アク・スウ温泉の放電
1911	K. I. Bogdanovich	アク・スウ温泉地地質
1912	D. I. Mushketov	ジェティ・オグズ温泉成分
1914	K. I. Bogdanovich	アク・スウ温泉再度の地域地質
1914	A. F. Svirchevskiy	アク・スウ温泉の短い地質学的情報と, 温度と放電
1915	K. I. Argentov	イシック・アタ温泉成分や放電
1923	S. V. Mashkovtsev	イシック・アタ温泉成分や放電
1924	Mihalkov V. N. & Chernyavskiy	ジャラル・アバド地域空気
1924	Golubkova	ジャラル・アバド温泉成分
1925-1926	Novikov	ジャラル・アバド温泉成分
1926	Hlopin	アク・スウ温泉の放電放電・放射性・ガス成分
1927	V. A. Novikov	ジェティ・オグズ温泉の化学成分
1928	N. M. Prokopenko	ジェティ・オグズおよびイシック・アタ温泉成分や放電
1928	N. N. Zlatovratskiy, Harchenko	ジェティ・オグズ温泉水の放射性の測定, 成分
1929	Z. A. Kanunnikova, M. M. Kononova, P. A. Gryushe	アク・スウ温泉の水のマイクロバイオリジー
1929-1930	N. S. Nazarov	ジャラル・アバド温泉日射測定, 空気の透明度, 放射性ガス
1931	N. M. Prokopenko	地質, 放電, 放射性, ガス成分
1931	V. A. Aleksandrov	景観, 気候, 温泉資源, 治療への適応と禁忌
1931	D. P. Prochuhan	掘削作業, 地域地質, 温度や流量源の系統的測定
1932	L. V. Komlev	科学成分, 放射性, 容存ガス
1940	キルギス国立医学大学 及びキルギスソ連科学 アカデミー	ジャラル・アバド, イシク・アタ, アラムィチュン温泉, ショル・ブラック温泉, ジェルガラン温泉, そしてジャルタッシュ 鉱床の炭酸水などが物理化学的に検証
1957	キルギスの温泉と理学 療法研究所	硬水に関する一般概要や, その種類, 分布, 物理学的概要
1985	D. A. Alymkuov & N. G. Bikmuhametova	温泉源の地理的状況や温泉成分
1994	Z. I. Melnikova S. M. Babenko L. I. Solovyova	温泉源の地理的状況や温泉成分

出所: Aleksandrov(1931), Alymkuov(2002) の文献調査により, 著者作成

表 3. キルギスにおけるリゾートの利用（1930）

区分	リゾート名			
	ジェティ・オグズ	アク・スウ	イシク・アタ	コイサラ
リゾート種類	温泉	温泉	温泉	気候 ¹
詳細地（州）	イシク・クル	イシク・クル	チュイ	イシク・クル
標高（m）	2200	1920	1775	1580
利用者数（人）	514	1259	3318	475
利用者集客圏（%）	キルギス(53), ウズベキスタン(37)	キルギス(11), ロ シア(68), ウズベキスタン (21)	キルギス(20), ロシア(80)	キルギス(59), ウズベキスタン(37), カザフスタン(2), タジキスタン(1), ロシア(1)
利用者属性（%）	現業職など ² (52) ホワイトカラーなど ³ (35), 農民(5), 他(8)	農民(63), ホワイトカラー など(22), 現業職 (4), 他(11)	現業職など(57), ホワイトカラーなど (27), 他(16)	ホワイトカラーなど (58), 農民(32), 他(10)
利用方法	体を石鹸で清潔後、 温泉入浴(1日1回), 6分～8分 飲用, 日光浴	体を石鹸で清潔 後、温泉入浴、飲 用, 空気浴, 日光 浴	体を石鹸で清潔後、 温泉入浴、飲用、 空気浴	山湖入浴, 空気浴, 日光浴 (朝の10時～12時), 砂浴(33℃-48℃), 馬乳酒治療(1日1回)
利用シーズン	6月10日～9月10日	5月1日～10月10日	5月1日～9月15日	6月15日～9月15日、 時には10月まで
利用期間	1ヶ月	1～3日	1ヶ月	2週間

¹ 高山地に位置するイシク・クル湖入浴、空気浴、日光浴、砂浴、馬乳酒飲用の意味

² 工場労働者やサービス労働者（運転手、掃除婦など）

³ 医者や先生をはじめ、公務員、国家経営幹部職まで

出所：Aleksandrow(1931)『キルギスのリゾート』より著者作成

Transformation of “tourism” due to the changes in the social system: the life history research of hot spring users in the post socialist Kyrgyz Republic

AKMATBEKOVA, Gulzat

This paper analyzed the transition of tourism in the Kyrgyz Republic (Kyrgyzstan) on the basis of one person’s life story, who was born in the Soviet Union and experienced the transition of the social system. It covers and compares Soviet Union period and after, where the Kyrgyz Republic became independent in 1991.

Starting from people in Central Asia, religion believers from China and India used to visit hot springs and treated them as sacred places. Also for Kyrgyz nomads hot springs were not only essential place for body cleansing, but also the place to cure diseases.

Since Kyrgyzstan went under governance of the Russian Empire the usage of hot springs undergo big changes. According to the Mr. A, there was no much difficulties in everyday life in the Soviet Union, but in order to be able to access hot spring facilities one had to do some sort of work. Also people were not allowed to travel abroad. For instance, people like Mr. A, who was doctor and a member of parliament of the Kyrgyz Republic, and other people like him who belonged to a high social stratum, as a reward for their work used to receive houses. They were also assigned official cars with drivers, which they could use for their private purposes. People from high stratum of society were also able to take long-term vacation to use hot spring facilities. Human relations in Soviet Union also played a big role for career growth and it gave possibilities to obtain voucher (ticket) for staying at hot spring facilities. Human relations had the same values as money in capitalism. It means one wouldn't have much choices in tourism if one had more economic afford as in capitalism. Human relations were essential factor

and increased chances to use hot springs.

Since Kyrgyz Republic became independent, hot spring facilities are available to anyone via vouchers or pay by cash. On the other hand it brought a negative effect to Mr. A, because voucher prices are expensive and he can't now afford it because of his small salary.

Along with the transition from socialism to capitalism, hot spring facilities started to be utilized under market economy rules.

社会体制転換に伴う「観光」の変容（アコマトベコワ）